

日本の教育学説における人格概念の検討

—ヘルバルト主義を中心に—

A Study on Concept of Personality in Japanese Theory of Education Focused on Japanese Herbartianism

鶴殿 篤

キーワード：人格、教育思想、教育学説、ヘルバルト主義、開発主義

1. はじめに

本論の目的は、教育学における「人格」概念を理解するため、基本的な歴史的事実を確認することにある。

教育基本法の第一条において、「教育の目的」は「人格の完成」にあると明記されている。1947年に制定された教育基本法は2006年に抜本的な改訂を蒙ったが、第一条の「人格の完成」という文言には手が付けられなかった。それは必ずしも「人格の完成」という言葉の中身が変更されなかったことを意味しないが、いずれにせよ教育において引き続き「人格の完成」が重要なテーマであることは確かである。

本論は「人格」概念について検討することの現代的な意義を意識しつつ、より本質的な議論を可能にするために、いくつかの歴史的事実を確認することを目的とする。本論が明らかにする事実は、第一に、「人格」という言葉が教育学の用語として使用され始める歴史的経緯である。「人格」という言葉が教育学の用語として本格的に使用され始めるのは明治20年代後半のことである。本論が先行研究に対して付け加える新たな知見は、第一にこの歴史的な事実である。そして本論が明らかにする第二の事実は、「人格」が当初から教育学の中心的な概念として使用されていたことである。特にヘルバルト主義と呼ばれる教育学説においては「人格」は中心的なテーマであり、それが前代の開発主義と呼ばれる教育学説に対して決定的に異なる特徴となっている。「人格」概念は使用され始めた当初から教育学説を転換させる中核的な概念として機能した。本論はこの事実をヘルバルト主義学説の内容に即して示す。従来、とすればヘルバルト主義は「五段階教授法」など教育方法に限定されて、あるいは教育勅語体制に合致させるために換骨奪胎された学説として理解されてきた。それは一面的には確かに歴史的事実ではある。しかし「人格」概念の導入過程を検討することにより、ヘルバルト主義の新たな位置づけを考える契機となるだろう。

以上のような課題を明らかにするために、本論が中心的な史料として扱うのは明治期日本の教育学説である。特に開発主義とヘルバルト主義の翻訳書および概説書を扱い、それぞれの学説における「人格」および周辺概念の使用例を確認検討する。教育学における「人格」概念をより深く理解するためには法学や倫理学など隣接領域における「人格」概念の検討も必要となるが、それは今後の課題とする。

2. 先行研究における「人格」概念

日本における「人格」概念の発地点を実証的に追求したものに、佐古純一郎の研究がある。佐古はキリスト教関連雑誌や哲学雑誌を主な史料として personality の翻訳語の調査を行い、「人格」という用語の発地点を明治22(1889)年と特定し、キリスト教思想の「人格神」やカント倫理学の受容過程に関する重要な知見を示している。ただし後に見るように、「為人」という訳語を完全に見落としていたり、国家法人に関する法学的な「人格」概念も完全に見落とすなど、いくつかの本質的な不備も見られる¹⁾。しかし佐古の研究が明らかにしたように、日本語の「人格」という用語が和語として伝統的に使用されてきた言葉ではなく、personality の翻訳語として使用され始めた言葉であることは間違いないだろう。

またヨーロッパにおける person 概念の形成に関しては、小倉貞秀の研究が示唆に富む²⁾。小倉は古代ローマからカントに至るまでの person 概念の変容を検討し、それがキリスト教における三位一体の思想や中世スコラ学の中核概念であったことを示している。日本における「人格」概念を検討する際にも重要な知見が数多く提示されている。

一方、「人格」という翻訳語に関しては、personality という原語とは別に、character にも注意する必要がある。田中智志は「人格形成概念の誕生」において、アメリカにおける character 概念から「人格」概念の誕生を歴史的に検討している。田中は「カントの Persönlichkeit(Personality) を「人格」と訳すなら、道徳哲学的な character もまた「人格」と訳すべきであり、同じように Character formation も「人格形成」と訳すべきである³⁾と主張している。この主張に傾聴すべき論点が含まれているのも確かだが、明らかな事実誤認が含まれていることは指摘されねばならない。まず田中は法学という巨大な領域を完全に見落としている。日本の法学においては明治20年代後半にはすでに「人格」という訳語が定着しており、現在に至るまで現実の法制の中で我々の生活を規定している。たとえばローマ法から日本の民法までの person 概念の変遷を検討した古田裕清は「"Person" は法的・倫理的・宗教的文脈で個々の人間を指して用いられる語です。それ以外の文脈で人間を指し示す際には、この語を用いることはできません⁴⁾」としている。character をも「人格」と訳すのは、このような person 概念を不明確にする恐れがある。さらに田中の主張するように personality と character を同じように「人格」と訳すのでは、擬制的な法的人格、すなわち会社や地方自治体や国家や家族などに与えられる「法人格」の理解に支障が生じるだろう。法学を視野に入れたとき、character を personality と区別せずに「人格」とすることには様々な問題が生じる恐れがある。法学における「人格」というテーマは「国家」に関する評価など慎重な配慮が必要な領域なので、別の機会に改めて検討の対象としたい。

また、田中はヘルバルトの日本語訳で character が「強志」や「志操」と訳されたことと記述しているが、実際にはヘルバルト主義の翻訳においては明治20年代半ばから「品性」という訳語が定着して広範に使用されている上に、「品性の陶冶」という言い回しは教育界において頻出している⁵⁾。さらに日本の倫理学の基礎を築いた大西祝も明治中期に「品性」という語を多用し、西田幾多郎など明治後期以降の倫理学はそれを引き継ぎ発展させていく。「人格」と訳された personality に対して、character が別の翻訳語を当てられてきたことには注意しておく必要があるだろう。

また田中は「日本では(中略)道徳哲学的なcharacterはほとんど注目されてこなかった」⁶⁾としているが、実際にはウェイランドなどスコットランド道徳哲学は福沢諭吉が慶応3年から慶應義塾で教材として利用するなどして広く認知され、明治初期に盛んに訳出されている⁷⁾。そして主に「気風」と翻訳されたcharacterは、明治初期から重要な議論の対象となっている。たとえば明治期を通じてベストセラーだったスマイルズ「西国立志編」⁸⁾を翻訳した中村正直は、明治11(1888)年にはまさに「キャラクター」と題されたスマイルズの書を「西洋品行論」⁹⁾として訳出し、徳富蘇峰が盛んに言及するなどした結果、広く読まれることになる。ここで中村はcharacterを「品行」と翻訳したが、この「品行」という語は中村が起草した教育勅語の草案「徳育大意」の鍵概念として用いられている。教育勅語草案の「智徳並ニ長ジ品行完全ナル人民トナリ国ノ品位ヲ上進セシメ」¹⁰⁾という文の中にある「品行」とは、中村が一貫してcharacterの訳語として用い続けた語である。日本では、道徳哲学的なcharacterは明治期を通じて関心の対象だったが、「人格」という訳語は一般的に使用されない¹¹⁾。characterは教育学にとって重要な概念ではあるが、特にアメリカにおいてcharacter概念が変容した疑いがある以上、「人格」概念との異同に対する判断には慎重な態度が必要になると思われる。

3. 「人格」という用語の登場-教育学における「人格」

さて、それでは「人格」という用語が教育学に登場したのはいつのことか。表1は、明治初期から中期の教育論や教育学の書籍の中に、「人格」という用語が何回登場したかをカウントしたものである。表1に明らかなように、明治20年代半ばまでは一切姿を見ることができない。明治10年代後半から開発主義が流行を始めるのは周知の事実であるが、表1の中にほぼ網羅した開発主義の代表的な本には、ただの一度も「人格」という用語を見ることはできない。

教育学において「人格」という語を初めて使用したのは、管見の限り、ヘルバルト主義に属する本である。表1で最初に「人格」を使用しているのは明治28年の藤代禎輔翻訳「独逸へるばると教育学」であり、同年の谷本富「科学的教育学講義」は、周知のようにヘルバルト主義の一般的普及において大きな役割を果たした本である。ヘルバルト本人の教育理論書と、日本におけるヘルバルト主義の一般啓蒙書において、最初に「人格」という用語を見出すことができるのである。

ただし明治20年代後半になっても「人格」という用語はまだ一般的にはなっていない。事実として、「人格」という用語は明治末に至ってようやく定着することになる。たとえば澤柳政太郎は、明治43(1910)年の「学校にて陶冶せる青年の人格如斯して破壊せらる」と題せられた文章の中で、「従前は「人格」といふやうな名詞はまだ無かつた」¹²⁾と述べている。中島力造は明治44(1911)年の「教育者の人格修養」と題された本の中で、「人格といふ言葉は新しい訳語である、西洋の言葉を訳する為に造つた言葉でありまして我邦では昔の書物などには見えて居りませぬ、始めて用ひてよりまだ三十年になりませぬ、然し今日は新聞雑誌上に使ふやうになつて自然に広まつて殆ど全国到る処で此言葉を知らぬ者は無い程広まつて来たのであります、もともと新訳語でありますから多くの人が其意味を明に知らぬのも無理はない」¹³⁾と語っている。

表 1

明治初中期教育学関連書籍における「人格」「為人」の数

年	月	著者・訳者	書名	原著者	人格	為人	備考
明治6	8	土方幸勝	師範学校小学教授法		0	0	
	9	箕作麟祥	百科全書教授法	チャンブルス	0	0	
	12	諸葛信澄	小学教師必携		0	0	
明治7	4	箕作麟祥	学校通論	ウィケルスハム	0	0	
	11	林多一郎	小学教師必携補遺		0	0	
明治8	4	諸葛信澄	補正小学教師必携		0	0	
	10	伊澤修二	教授真法		0	0	
	12	金子尚政	小学授業必携	カルキン	0	0	
明治9	6	生駒恭人	小学授業術大意		0	0	
	6	ファン・カステール	学室要論	ジョハン・エスハート	0	1	
	7	ファン・カステール	教師必携	ノルゼント	0	0	
	8	青木彌清	師範学校改正小学教授方法		0	0	
	12	感加新底爾	彼日氏教授論	ページ	0	0	
明治10	1		那然小学教育論	ノルゼント	0	1	
	5	黒沢寿任	加爾均氏庶物指教	カルキン	0	0	
	8	下村房次郎	教育新論		0	0	
明治11	7	甲斐徳衛	加氏教授論	カルデルウード	0	2	
	12	永田健助	塞兒敦氏庶物指教	シェルドン	0	0	
明治15	10	伊澤修二	教育学		0	0	下巻16年4月
明治16	6	白井毅・若林虎三郎	改正教授術		0	0	
	10	淺野桂次郎	教育学		0	0	
	11	伊澤修二	学校管理法		0	0	
	12	森岩太郎	教育新論		0	0	
明治17	2		行政学教育篇	スタイン	0	0	
	4	元良勇治郎	教育新論		0	0	
	5	白井毅・若林虎三郎	改正教授術続編		0	0	
明治18	1	添田壽一	倍因氏教育学	ペイン	0	1	
	2	高嶺秀夫	教育新論	ジョホノット	0	0	2巻18.6、3巻19.9、4巻19.11
	3	有賀長雄	阮柱加氏教育学	ジョホノット	0	0	下巻7月
明治19	2	斎藤貞蔵	教育学辞彙		0	0	
	11	有賀長雄	楓柱斯氏教育論	スペンサー	0	0	1巻9月、2巻10月
明治20	4	今泉源一郎	尋常小学教授学略説		0	0	
	4	国府寺新作	魯氏教育学(上)	ローゼンクランツ	0	0	
明治21	6	国家教育策	日下部三之介		0	0	
	10	能勢栄	教育学		0	0	2巻12月、3巻22年2月、4巻11月改正24年
	10	有賀長雄	蘭氏教授学	リンドネル	0	8	
明治22	3	国府寺新作	教育学講義		0	0	
	6	生駒恭人	普通教育学提要		0	0	
明治23	4	湯目彌隆	国家教育論		0	0	
	5	国府寺新作	魯氏教育学(下)	ローゼンクランツ	0	0	
明治24	1	久保田貞則	教育学		0	0	2巻8月
	1	平沼淑郎	国家教育新論		0	0	
	2	国府寺新作	普通教育学		0	0	
	4	日高真実	日本教育論		0	0	
	5	本荘太一郎	蘭氏新式教授術	デ・ガルモ	0	0	
	6	白井毅	教授新案		0	0	
	7	松尾貞次郎	魯氏教育哲学	ローゼンクランツ	0	0	
	11	能勢栄	根氏教授論第一	コンペーレ	0	0	
	12	大瀬甚太郎	教育学		0	1	
明治25	3	波江保	普通教育学		0	0	
	5	日高真実	教育に関する攻究		0	0	
	11	山口小太郎	教育精義	ヘルマン・ケルン	0	20	
	12	浜柳政太郎・立花鉄三郎	格氏普通教育学	ヘルマン・ケルン	0	0	
明治26	5	湯原元一	倫氏教育学	リンドネル	0	0	
	8	松尾貞次郎	教育哲学史		0	0	
	9	稲垣末松	蘭氏普通教育学	リンドネル	0	31	
	11	国府寺新作	新版増補ケルン教育学	ヘルマン・ケルン	0	22	
明治27	1	本荘太一郎	教育古典		0	0	
	4	広瀬吉弥	教育学		0	0	
	5	山路一遊	国家教育要義		0	0	
	8	能勢栄	新教育学		0	2	
	10	湯本武比古	新編教育学		0	6	
	10	谷本富	実用教育学及教授法		0	0	
明治28	3	能勢栄	萊因氏教育学	ライン	0	0	
	5	湯本武比古	新編教授学		0	9	
	8	国府寺新作	独逸ヘルバルト心理学	ヘルバルト	0	1	
	8	藤代禎輔	独逸へるばると教育学	ヘルバルト	3	0	2巻明治29.3
	10	岩田蔵次郎	ヘルバルト教育学階梯	ウーフェル	0	2	
	11	中島半次郎	ヘルバルトに関する攻究		0	11	
	12	谷本富	科学的教育学講義		5	0	
	12	尺参三郎	購買必携実用教育学		0	0	
明治29	3	勝田貞次郎	教育学		0	0	
	8	湯本武比古	ラインの教育学原理	ライン	0	33	
明治30	2	横山栄次	新説教育学		0	1	
	2	有終会	ヘルバルト教育学	ウーフェル	0	2	
	9	村上俊江	ヘルバルト教育学要義	フェルキン	8	1	
明治31	5	谷本富	将来の教育学		1	1	
	12	大瀬甚太郎	教育学教科書		1	8	
明治32	4	樋口勲次郎	統合主義新教授法		0	0	
明治34	5	吉田熊次	ドエーリング氏教育学	デーリング	5	0	
明治37	3	吉田熊次	社会的教育学講義		38	0	

中島によれば、明治末の段階で「人格」という言葉自体は広まっているが、その意味は一般には理解されていない。

さて一方、「人格」という用語が定着する以前は、personalityの訳語としては「為人」あるいは「人と為り」という語が一般的によく使用されていた。「為人」は「ひととなり」と読む。「為人」のように送り仮名が付いている例も散見される。「為人」は、日本では「古事記」¹⁴⁾、中国では「論語」¹⁵⁾に見られるように、千年以上の歴史を持っている伝統的な語である。返り点の付いていない「為人」という用法も広く見られ、たとえば坪内逍遙も近代小説論として重要な位置を占める「小説神髓」において使用している¹⁶⁾。教育学書における「為人」の用例は、明治9年「学室要論」や明治10年「那然小学教育論」から見るができる。特に明治25年の山口小太郎「教育精義」など、明治後期のヘルバルト主義の翻訳書における使用例が顕著であることが分かる。この「為人」という翻訳語は、ヘルバルト主義教育学が本格的に流行する明治30年代から次第に姿を消し、「人格」に取って代わられることになる¹⁷⁾。

その変化の理由を史料から直接的に読み取ることはできないが、伝統的な日常語としての「ひととなり」では外来のpersonality概念を適切に表現できなかったからこそ学術的な翻訳用の新語として「人格」が必要とされたのではないかと推測される。伝統的な「ひととなり」という言葉では表現できないpersonalityの過剰な厚みの部分にこそ、日本が西洋から学び取らなくてはいけない何者かが包蔵されていたはずである。そしてそれを日本の教育学界で最初に感得し、体系的に記述したのが、ヘルバルト主義と呼ばれる一群の教育学説である。

4. ヘルバルト主義における「人格」概念

以上、教育学において、「人格」という用語が明治20年代後半に翻訳語として登場した事実を確認した。次の問題は、ヘルバルト主義が「人格」という用語を初めて使用したという事実とはともかく、「人格」概念をどのように把握していたかであり、そしてそのことに対するその時点での評価である。たとえば大正期に「人格主義」教育学を主張することになる中島半次郎は、ヘルバルト主義の流行の原因を考察し、明治28年段階で以下のように述べている。

第一は、ヘルバルト派の教育学の本領が、人と為りを作ることを第一の主眼とすることなり。これ既に在来の教育学思想と比較して、一大顕著なる事実とす。¹⁸⁾

中島は明治10年代までの英米系教育学の変遷を綿密に跡づけた上で、ヘルバルト主義がそれまでの教育学説と異なる最大の特徴を「人と為りを作ることを第一の主眼とすること」と評価した。この評価は明治28年当時の学者の見解として注目に値する。中島はさらにヘルバルトの教育学説を解説するにあたって「人と為り」という言葉を多用する。「教育の全目的を人と為りに置き、知覚の同化を説きて多方の興味を開誘し、以て人と為りを助くべしと説きし」¹⁹⁾「所謂人と為りを作るの大原理、全教育学に貫通し」²⁰⁾と、ヘルバルト教育学の特徴が「人と為り」にあると繰り返し強調する。ヘルバルト主義教育学は、明治10年代に流行した自然科学中心の開発主義教育学とは完全

に異質の理論と理解されたのである。

澤柳政太郎は、明治44(1911)年の段階で、「ヘルバルト派の教育は(中略)人物養成性陶冶と云ふものを教育の最高の目的として居るから、丁度此の説は当時の教育の精神と一致して、日本に歓迎され、非常に発達して、今日尚勢力を振つて居る」²¹⁾と述べている。明治10年代の開発主義が自然科学中心の教授理論だったのに対し、ヘルバルト主義が「人物養成性陶冶」という人間中心の理論であったことが流行の原因であると澤柳は理解している。澤柳がヘルバルト主義流行の原因を五段階教授法などの教授テクニックではなく教育原理の観点から把握していることは、十分に注意されるべきだろう。

さて、この澤柳の発言の中にある「人物養成」という場合の「人物」という単語は person の翻訳語に当たる。「人物」という言葉そのものは伝統的に使用されてきた言葉ではあるが、教育学理論の中で使用されている場合には注意して読む必要のある言葉である。たとえばヘルバルト主義最大のイデオログとみなされている谷本富は、「人物」という言葉について注意を促し、以下のように述べている。

余輩が教育上に於て人物と称する者は、世俗の所謂人物とは稍々趣を異にせり。茲に所謂人物とは、ヘルバルトの所謂道徳的品性の強固なる人なり。道徳的品性の強固なる人とは、其意志強健剛毅にして、良心の命令を断行することを得る人を謂ふ。語を換へて言はば、確固たる見識を抱懐し、自信、主我の心つよき者をこそ人物とは謂ふなれ。²²⁾

谷本はわざわざ「世俗の所謂人物とは稍々趣を異にせり」と述べ、この「人物」という言葉が世俗語ではなく、翻訳語であり専門用語であることを示している。だから谷本が「教育の目的と云ふは児童の徳性を涵養し、人物を養成するにあり」²³⁾と述べる時、この「人物」は日本語の世俗的な意味に即しているのではなく、person の翻訳語であり、教育学の術語として用いられている。谷本が「世俗の所謂人物」と教育学における「人物」が異なる概念であることを示そうとすると、伝統的な語である「人となり」ではなく「人格」という新漢語を持ち出してくる十分な動機を認めることができる。

同様に、ヘルバルト主義の影響下において「森有礼氏の人物主義」²⁴⁾という表現があった場合、その「人物」は世俗語の意味ではなく、person の翻訳語としての学術用語と捉えるべきだろう。谷本は「学校は単に教授の機関にあらずして、教育の機関たらざるべからず」²⁵⁾と述べ「従来の学校教育は概ね学芸を教授するをのみ是れ事として、豪もこの人物養成と謂ふことに注意せざりし」²⁶⁾として、開発主義が自然科学中心の教育に終始したことを批判し、「修身科は勿論、爾余一切の教科に於ても前数章に於て纒々陳述せし如く、皆悉く道徳を中心とし、多方興味を振起するを怠らざるときは、必ずや大に見るべき者ある事疑なしとす。是れ教授の人物養成に於ける効能なり。」²⁷⁾と、繰り返し「人物養成」に注意を促している。谷本は「教授」と「教育」の概念を明確に区別した上で、前代の開発主義教育学説を「教授」として批判し、「人物養成」を掲げるヘルバルト主義こそが「教育」であると主張しているのである。

谷本の「人物養成」という表現は、別のヘルバルト主義教育学書では「人格の修養」という表現として顕れる。また例えばハウスクネヒトは「徳ナル者ヲ以テ教育ノ目的

トス」²⁹⁾と教育の目的を規定したが、数年後にはヘルバルト主義の教育学書の中に「徳は人格の固有性なり」³⁰⁾という表現を見いだすことができるだろう。

以上見たように、ヘルバルト主義は積極的に「人格」の形成を主張し、一般的にも後世においても、それが前時代の開発主義教育学との著しい違いだと認識されていた。自然科学中心の教育から人格形成中心の教育への転換において、ヘルバルト主義が決定的な役割を果たしたと認識されていたのである。教育の目的が「人格」の形成であるとしたヘルバルト主義の主張は、明治中期以降、教育学の常識となっていく。あるいはその主張は教育学の範囲を超えて、人間形成に関する一般的な言辞にも頻繁に見出すことができるようになるだろう。

「人格」の形成を具体化するのが「品性の陶冶」である。personalityの訳語が「人格」で、characterの訳語が「品性」である。先行研究では、この「品性の陶冶」が教育勅語に親和的だからヘルバルト主義が歓迎されたと説明されることがあるが、必ずしもそうとは言い切れない。その証拠に、キリスト教の立場からもヘルバルト主義の導入が要請されている。例えば内村鑑三不敬事件に端を発する井上哲次郎のキリスト教攻撃に対して学理的な批判を加えた大西祝³¹⁾は、明治23(1890)年の段階で、すなわち教育界でヘルバルト主義が流行する前の段階で、「徳育を専らとする(寧ろ唯一の目的を有徳の品格を作ることに置くヘルバルト主義の)教育の組織を先づ小学から始めねばならぬ」³²⁾と、ヘルバルト主義への理解を示している。その大西祝は、characterについて以下のように述べている。

徳育を施して人の品格(カラクテル)を形づくるには二つの事を予定せねばならぬ。即ち(一)人の性質は更へることが出来ると云ふこと、(二)又其更へ様によりては一旦一つの形を取つた以上は尚ほ二度とは元の形に立戻らぬ様にする事が出来ると云ふこと。³³⁾

大西はcharacterを「品格」と翻訳し、その可塑性と一貫性について注意し、その陶冶に最も適した学説がヘルバルト主義であることを、教育界でヘルバルト主義が流行する以前から認めていたのである³⁴⁾。また、大西祝は、中島半次郎が編集した『ヘルバルトに関する攻究』において「ヘルバルトの哲学史上と教育学史上とに於ける位置に就きては、中島教授と大西文学士とに負ふ所多く、殊に大西文学士は、稿成りて後、叮嚀に校閲の勞を執られたり。」³⁵⁾とされているように、ヘルバルト主義衰退の過程までヘルバルト主義に付き合うこととなる。大西は明治33年に亡くなっているが、その全集の編集に中島半次郎も関わっている。大西祝が西田幾多郎に大きな影響を与えたことは従前から指摘されているところだが、後に人格的教育学を唱えることになる中島半次郎にも深く関わっていることは注意されてよいだろう。

ヘルバルト主義の「品性の陶冶」という観念が教育界に歓迎されたことは、その"内容"ではなく"形式"から考慮されるべきである。「品性の陶冶」とはどのような"内容"にも適用することができる普遍的な"形式"であり、だからこそキリスト教道徳であろうが、教育勅語の精神であろうが、同様に適用することが可能であった。たとえば谷本富は、ヘルバルト主義がキリスト教的であるという非難に対して、「形式」という語を用いながら反論している。

耶蘇教的たるは免れざるべけれども、乍然換骨奪胎して、其の主要なる形式のみを存せば、我国に應用せんこと決して難からじ。(中略)

「教育報知」記者の説に拠れば、記者は何分にも日本の教育学の一日も早く建設せられんことを望むるゝが如し。(中略)余も亦固より日本の教育学の建設を渴望せり。(中略)ヘルバルト派にては凡て意志と道規と相合体するを以て、完全なる人物なりとせるまでにて、其道規なる者は如何なる道規に限るべしとは言はず。耶蘇教的道規にても可なり、儒教的道規にても可なり。固より択ばず。即ち其人物論は他の道念論、興味論と同しく、一個の抽象的形式論に過ぎざれば、国所の便宜に従ひて、相当の材料的議論を以て之れを充填して可なり。³⁶⁾

「品性の陶冶」が抽象的形式論であるならば、それを教育勅語の精神に親和的に適用できるのは当たり前であって、それ自体は何の説明にもなっていない。それぞれの教育論がどのような「品性」を陶冶しようとしたのか、その「内容」については個別に精査する必要がある。明治中期のヘルバルト主義に関して言えば、それが教育勅語の精神をアカデミックに説明する上で都合が良かったのは事実だったとしても、その導入経緯と周囲から曝された批判から推してみれば、そもそも教育勅語の「内容」と親和的であったことが導入の理由だとは考えにくい。ヘルバルト主義の移入は、明治末に中島や沢柳が証言しているように、それが「人格の完成」という「形式的」な価値を正面に打ち出していたことが最大の理由であると思われる。

5. おわりに

ヘルバルト主義は、品性の陶冶のために「思想圏の拡大」を通じた「多方興味の形成」という実質陶冶的な立場をとる。ヘルバルト主義においては形式的陶冶の発想は斥けられ、具体的な教材を用いて「思想圏」を拡大することが品性陶冶の前提となる。この実質陶冶的な立場はヘルバルトの心理学に根拠を持つ。具体的な知識量の増大が自然科学的な認識論において行われるべきことは、明治10年代後半から明治20年代前半にかけて流行した開発主義と呼ばれる学説の基本的な主張だった。しかし単に知識の量を増やすことは「教育」ではなく「教授」に過ぎない。知識量の増大が品性陶冶となるためには、それが「多方の興味」に至らなければならない。現実の資本主義社会で生きる「人格」は、資本主義が必然的に導く「分業」に対応したものでなければならない。それは具体的にはジェネラリスト且スペシャリストとして社会に位置を占めることである。「多方の興味」とは、ジェネラリストとしての基本的な意欲と態度が形成されていることを意味する。そしてそれを具体的に教材として編成する際、カリキュラム編成の論理として「開化史的段階」と「中心統合法」が採用される。

この「思想圏の拡大」を通じた「多方興味の形成」、そしてカリキュラム編成論は、ヘルバルト主義の特殊性である。「ヘルバルト主義が衰退した」と誰かが言ったとき、その具体的な中身は、こういったヘルバルトの心理学に基礎を持つ「思想圏の拡大」を通じた「多方興味の形成」とカリキュラム編成論という特殊性が説得力を失ったことを意味している。こういったヘルバルト主義学説の特殊な諸部分が明治30年以降に説得力を失ったことは事実であり、これを指して「ヘルバルト主義の衰退」と呼ぶなら、それは端的に事実と呼べるものであろう。

ただし、本論が検討の課題としたのは、教育に関わる普遍的な「概念」およびそれを表象する「用語」である。ヘルバルト主義が日本にもたらし、教育界に残したものは、「人格」という概念であり、教育は「人格」を形成するものだという観念であり、それを記述するための様々な概念装置であり、それを体系的に構成するのが教育の「学」であるという観念である。ヘルバルト主義学説の特殊性は説得力を失ったとしても、ヘルバルト主義によって日本に持ち込まれた教育の「学」に関する観念は、強固に、現在までも生き残っている。さらに言うなら、当時の日本のヘルバルト主義者たちも、ヘルバルト主義学説の特殊性自体に魅力を感じていたわけではないだろうと思われる。ヘルバルト主義を通じて初めてもたらされた「教育の本質」という観念、そしてそれを描くことを可能にした様々な概念装置こそが、多くの人間を惹きつけたはずである。だから、ヘルバルト主義の特殊性は簡単に葬られても、それを記述する際に初めて日本人の目に触れた普遍的な諸概念は、百年以上が経過した現在においても、事実として、生き残っている。先行研究において「立ち枯れの運命」と評価されているところの輸入教育学であるが、簡単に捨て去られたのはあくまでもそれら移入学説の特殊な部分であって、その本質である諸概念は確実につかみ取られて後代の学説の発展に生きているのではないだろうか。むしろ教育の本質とは関係がない特殊性だと主体的な判断が下せるからこそ、ヘルバルト主義の特殊性は簡単に葬ることができたのだと思われる。2006年の教育基本法改正においても「教育の目的」が「人格の完成」であることについて批判が加えられた形跡はない。何を以て「人格の完成」とするかという中身はともかく、「教育は人格を完成させる営みである」という信念については変化がない。その信念は、明治中期のヘルバルト主義流行に源流を見ることができよう。またあるいは、「人格の完成」という「形式」に対して明治中期に教育勅語の精神が注入されたことを省みれば、現在の教育基本法の「人格の完成」の「内容」として何が詰まっているかは、注意して検討されるべきであろう。

註

- 1) 佐古純一郎『近代日本思想史における人格観念の成立』朝文社、1995年。佐古は「概念」ではなく「観念」の検討を行っている。佐古によれば、明治22年に『哲学会雑誌』に掲載された谷本富「支那古宗教論」が日本で初めて「人格」という言葉を使用した。
- 2) 小倉貞秀『ペルソナ概念の歴史的形成—古代よりカント以前まで』以文社、2010年。小倉は『カント倫理学研究』（理想社、1965年）でカント倫理学における「人格」と「人格性」の区別を精査しており、こちらの研究も日本の「人格」概念を考える上で重要な示唆を含んでいる。
- 3) 田中智志『人格形成概念の誕生』東信堂、2005年、p.10。
- 4) 古田裕清『翻訳語としての日本の法律用語 原語の背景と欧州的人間観の探求』中央大学出版部、2004年、p.39。
- 5) たとえば明治26年にヘルバルト主義教育学者リンドネルの本を翻訳出版した湯原元一は「教育学上の述語で、今日一般に用ひられてゐるものは、多くはヘルバルト主義の全盛時代に作られたものである。たとえばカラクテルを品性と訳したのは私である。（中略）別に典故もないのに、それが却つて世間に広く採用されたと云ふのは、畢

竟それが多数者の常識に投合したからであらう」と証言している。(湯原元「ヘルバルト派教育学説の全盛時代」国民教育奨励会編『教育五十年史』民友社、大正11年、p.186)。ただし事実としては湯原の訳の10年前に「品性」という訳語が登場している。「品性」という訳語が一般化するのには湯原が言うようにヘルバルト主義の流行後のことで、それ以前はcharacterは「気風」や「品行」と訳されることが多かった。たとえば明治24年の大瀬甚太郎『教育学』は「気風」に「カラクテル」とルビが振ってある(p.288)。

6) 田中前掲書p.9。

7) 松野修『近代日本の公民教育』名古屋大学出版会、1997年。E.H.キンモンス、広田照幸・吉田文・加藤潤・伊藤彰浩訳『立身出世の社会史—サムライからサラリーマンへ』玉川大学出版部、1995年など。

8) 中村正直訳、スマイルス『西国立志編』明治3年。その中で多用されるcharacterは、明治中期以降は「品性」と翻訳され直すようになる。

9) 中村正直訳、スマイルス『西洋品行論』明治11年。

10) 高橋昌郎『中村敬字』吉川弘文館、1966年、p.252より重引。教育勅語草案「徳育大意」は、明治23年、文部大臣芳川顕正より依頼を受けて起草されている。

11) characterは明治後半には「性格」と翻訳されることが一般的となっている。「性格」は「個人の品性・品格の意で用いられていたが英語characterの訳語として一般化し、明治時代にはその物に備わる固有の性質、本質的特徴の意味が加わった」。惣郷正明・飛田良文『明治のことば辞典』東京堂出版、1986年、p.290。

12) 澤柳政太郎「学校にて陶冶せる青年の人格如斯して破壊せらる」『実業之日本』第13巻第3号、『澤柳政太郎全集』2巻p.224。

13) 中島力造『教育者の人格修養』目黒書店、明治44年、p.20。

14) 「時_と有_り舍人。姓稗田、名阿礼、年は廿八。為人聡明、度目誦口、扨耳_と勸心。」『古事記』上巻並序。「時に舍人ありき。姓は稗田、名は阿礼、年はこれ二十八。人と為り聡明にして、目に渡れば口に誦み、耳に扨れば心に勸しき。」岩波文庫『古事記』p.15。

15) 「有子曰其為人也孝弟而好犯上者鮮矣」『論語』学而第一など。

16) 「那ポレオンの為_と人」。坪内逍遙『小説神髓』明治18年、38丁。「為人」には「ひと、なり」とルビがふってある。

ただし事態を複雑にしているのが、明治20年代後半にpersonが「人格」と翻訳されるようになった後、この「為人」がcharacterの翻訳語としても使用されるようになった事実である。大西祝『倫理学』第二巻の付録「倫理学用語和英独対訳表」(『大西博士全集』警醒社、明治36年)では、ドイツ語のPersonあるいは英語のPersonalityが「人格」とされる一方で、ドイツ語のCharakterあるいは英語のCharacterが「為人」とされる。

17) ただしアカデミックな領域で術語としては使用されなくなった「為人」も、一般的な用語としては「人となり」という形で現在でも頻繁に使用されている。

18) 中島半次郎編『ヘルバルトに関する攻究』普及社、明治28年、p.12。この本は『教育時論』に掲載されたヘルバルト主義への批判や谷本富の反論、教育時論の社説などを編集したものであり、この時点でのヘルバルト主義理解が総合されたものとなっている。編集者の中島半次郎は大正年間に入ってオイケン人格主義教育学を受容して「人

格的教育学の思潮』(大正2年)『人格的教育学と我が国の教育』(大正3年)を著し、大正期の新教育に多大な影響を与えることになる。

19) 同 pp.29-30。

20) 同 p.31。

21) 澤柳政太郎『我国の教育』同文館、明治43年、pp.407-408。

22) 谷本富『実用教育学及教授法』六盟館、明治27年、p.105。

23) 同 p.66。

24) 槇山栄次『初等教育の実際』前掲『教育五十年史』p.193。森有礼本人が使用している「人物」という言葉も世俗一般の「人物」とは異なるニュアンスを帯びているが、森の教育思想の検討は改めて課題としたい。

25) 谷本前掲書 p.102。

26) 同、p.104。

27) 同、p.107。

28) 藤代禎輔訳『独逸ヘルバルト教育学』明治28年、p.49。

29) ハウスクネヒト・訳者不明『教育学汎論』。寺崎昌男・竹中暉雄・樽松かほる『御雇教師ハウスクネヒトの研究』資料編 東京大学出版会、1991年、p.207。刊行年不明。ルビ原著。寺崎らによれば、明治22(1889)年2月5日付内務省より送付の印がある。

30) 藤代訳前掲『独逸ヘルバルト主義教育学』p.49。

31) 大西祝は、明治11(1878)年、同志社英学校で新島襄から受洗している。キリスト教と教育勅語の衝突問題については、大西祝『耶蘇教問題』『教育時論』第284号、明治26年3月、大西祝『当今の衝突論』『教育時論』第296号、明治26年6月など。「教育と宗教」第一次論争については、久木幸夫編集『日本教育論争史録 第一巻近代編(上)』第一法規出版、1980年、pp.86-108を参照。

32) 大西祝『徳育について一言』『学林』第6号、明治23年。前掲『大西博士全集』p.508。

33) 同 p.506。ちなみにこの大西の「徳育について一言」に対し、澤柳政太郎がソクラテスやショーペンハウエルの character 概念解釈を巡って批判を加え、大西が再反論を行っている。大西は、澤柳が「人性」と「人の性質」を混同していて character 概念を把握していないと判断し、「予ハ先ニ品格ナル語ノ意義分明ナランガ為ニ括弧中ニ洋語ヲ挟ミ置キタリしつかりトシタル性質ノ無キ人ヲ英語ニハからくて無キ人トモ云フト覚ヘタリ」と断っている。大西祝『徳育上の意見に就いて澤柳文学士に答ふ』『学林』第11号、明治23年、前掲書 p.524。「人性」は、一般的には "human nature" の翻訳語。

34) 明治28年頃起こったヘルバルト主義批判は、ヘルバルト主義がキリスト教的であることを理由の一つとして挙げている。

35) 中島半次郎編前掲『ヘルバルトに関する攻究』凡例 p.1。引用文中の「中島博士」とは、半次郎ではなく、ドイツ観念論研究者の中島力造。

36) 谷本富『ヘルバルトの教育学に関する謬見を駁す』『教育時論』第361号、明治28年4月、p.14。傍点原著。谷本はさらに『教育時論』第380号(明治28年11月)でも反論を行っている。